

# Harem Providence

ハーレムプロヴィデンス



試し読み版

# Characters

登場人物紹介



Maid

**エリザベス**

オレアンダー家のメイド。ギャナックの身の回りの世話を命じられているが…?

**ギャナック**

ラルフィント王国の少年魔王。王位を追われ現在は幽閉生活を送っている。

## リオレイア

ギャンナックの傅役。重度のショタコンであること以外は非常に優秀な女騎士。

*Knight*



*Noble*

## ガーネット

辺境貴族オレアンダー家の当主。  
ギャンナックに性的な虐待を加える。

第一章	籠の鳥
第二章	転機
第三章	逃避行
第四章	運命の再会
第五章	決戦の前夜
第六章	復讐戦

## 第一章 籠の鳥

「陛下、お寒くはございませんか？」

大理石と黄金と宝石が存分に使われている、世界でもっとも大きく贅沢な寝台の上で少年は寝ていた。

それもそのはずである。

この寝台の主は、世界の四分の一を支配していた王国の君主であった。つまりは事実上、世界の頂点に立っていたのだ。

ラルフイント王国の首都ゴットリープにある王宮の奥の院。横たわる少年の名は、ギヤナックといった。御年六歳。

仙樹暦900年。父親である国王チムールが亡くなったため、唯一の嫡子である彼が至尊の冠を継承していた。

「別に……」

寝台に寝ていたのは、ギヤナック独りではなかった。

どこの国であろうと、王と名がつく者にプライベートはない。いつ何時、刺客に襲われるかわからないのだから、家臣たちも気を遣う。

まして、世界最大の国家の王ならばなおさらだ。

「そう、おっしゃらずに。ほら」

左肩を下に横臥させられたギヤナツクは、顔面に柔らかいものを押し付けられた。白く大きな乳房である。

「はあん♪」

ギヤナツクの後頭部を抱き、自らの乳房に顔面を埋めさせたのは、大柄なお姉さんだった。

蜂蜜色の豊かな頭髪を後頭部で縛ったポニーテールにしている。

卵形の顔には、大きな目。その奥ではアイスブルーの瞳が輝く。鼻と口も大きい。大柄な体躯に相応しく肩幅もあって、骨太だ。乳房は大きく、腹部は括れ、臀部は張るといって堂々たる美女である。

普段は軍服の上から鉄色の鎧を着ているのだが、夜着ということで現在は半透明なネグリジェを着て、ブラジャーとショーツという装いだ。ただし、ブラジャーを下ろして巨大な乳房を露出させている。

彼女の名前は、リオレイアという。このとき二十歳。

ラルフィント王国の名将として知られた大將軍モーレの孫娘で、本人も極めて優秀な女騎士として知られていた。

だからこそ、ギヤナツクの生まれたときから傳役ふやくとして、傍仕えに選ばれたのだ。

このときも油断なく、手の届くところに巨大な両手剣を置いている。

家柄、才幹、容姿、忠誠心。いずれをとっても理想的な女騎士である彼女は、「女騎士の中の女騎士」と呼ばれ、ラルフィント王国の女騎士たちの憧憬と尊敬の対象である。そんな彼女にただ一つ欠点があったとすれば、夜な夜な護衛と称して主君の寝台に潜り込んできて、添い寝をしたがることだ。

それだけではなく、なぜかギヤナツクの顔を自らのおっぱいに押し付けたり、逸物に触ってきたりする。

彼女の行為の理由は知らなくとも、それなりに気持ちよかったので、ギヤナツクは放置していた。

しかし、そのせいか、リオレイアの行いは日に日にエスカレートしてしまっている。

夜中に違和感を覚えたギヤナツクがふと目を覚ますと、おしっこをするための器官である逸物を、リオレイアが口に咥えていたときには、心の底から驚いた。

さらには右手をショーツの中に入れまさぐりながら、左手で乳房を揉みしだき、なにやら泣きそうな表情で半開きの口から涎を垂らし、獣のような呻き声をあげていたこともある。

つまり、ラルフィント王国にあって超名門のお姫様で、才能、容姿にも恵まれて、理想

の女騎士として、多くの女騎士に憧れられ、手本とされる。独身の男性騎士たちにアンケートを取ったら、間違はなくお嫁さんになりたい女性のナンバーワンに選ばれるだろう。リオレイアの正体は、シヨタ主君に対する欲情を抑えられない変態お姉さんだったのだ。

ギヤナツクはあまりの恐怖から、寝たふりを続けるしかなかった。

とにかく、リオレイアは昼間、人目のあるところではとても頼れるお姉さんなのだが、夜二人つきりになるととても危ないお姉さんだったのである。

現在も当たり前に、ギヤナツクの寝間着のズボンの中に手を入れると、逸物を包み込んできた。

「リオレイア、やめてよ」

いくら信頼している大好きなお姉さんとはいえ、無理やり逸物を握られるのは愉快ではない。

ギヤナツクの不満の声に、鼻息を荒くしたりリオレイアが応じる。

「おちんちは子供のころから鍛えることによって、成人したとき大きく固く、そして、我慢強く育つといえます。陛下におかれましては、おちんちんも超一流に育っていただく必要ありません。そのための修行とお心得ください」

「そ、そうなの……?」

傳役のお姉さんにそういわれると、ギヤナツクとしても反論できない。

仕方ないので、リオレイアの好きにさせる。その代わりと云ってはなんだが、ギヤナツクは泣く泣く目の前の乳房を好きにさせてもらった。

「ああん、そうです。わたくしのおっぱいでしたら、ご自由にお触りください」

シヨタ主君が、自分の乳房に興味を持ってくれたことが嬉しいらしくリオレイアは、声を弾ませる。

むにゅつと握ると、乳房は驚くほどに柔らかかった。

少し面白かったので、ギヤナツクは乳房の根元から先端にかけて、なにかを絞り出すように揉んでみる。

先端のピンク色の乳首が、ニョキョニョキと伸びてきた。

驚いたギヤナツクは鼻を近づけて、クンクンと匂いを嗅ぐ。それをみたりオレイアが、興奮を隠しきれない声を絞り出す。

「ああん、へ、陛下、おっぱいを吸いたいのでしたら、遠慮なさらずにお吸いください」  
「嫌だよ。ぼくもう子供じゃないんだから」

たまたま目につくところにあつたから触っただけで乳房にたいして興味があるわけではない。まして、乳首を吸うほど子供ではない、とギヤナツクは主張したかった。

「そう、おっしゃらずに、ほら♪」

鼻息を荒くしたりオレイアは身を起こすと、自らは寝台の中央で正座をし、その太腿の

上にギヤナツクを横座りにさせた。両脚をリオレイアの右側に投げ出した形だ。

逸物は当然のように、リオレイアの右の掌中に握られている。

「ささ、遠慮なさらずに、男がおっぱいを好きなのは極めて自然なことなのです。大丈夫、ミレデイさまに内緒にしますから。ちよつとだけ、ちよつとだけわたくしのおっぱいを吸ってみてください」

「もう仕方ないなあ、ちよつとだけだよ」

鼻先に乳首を突き出されたギヤナツクは澁々ながら、ピンク色の乳首に口を近づける。

「さ、さあ、早く……遠慮なさらずにチューと」

興奮して急かしてくるリオレイアの顔をチラリと見上げると、両目は大きく開かれて、逆に瞳孔が小さくなっているようだ。二つの鼻の孔が無様なほどに大きく広がっている。

せつかくの綺麗なお姉さんが、台無しと言いたくなる表情だ。

「もう、わかったよ」

素直に言うことを聞くのが、少し業腹に思えたギヤナツクは、少し悪戯をしてやろうと舌を伸ばし、ピンクの突起をペロリと舐めた。

「ああん♪」

ギヤナツクを抱いて、リオレイアはのけぞる。

「す、吸ってください、とお願いしたのに、ああ、舐めるだなんて……」

昼間、女騎士の中の女騎士として、凜々しく振舞っているリオレイアが見せているとは思えぬだらしない表情を面白く感じたギャナツクは、両手にそれぞれ持った乳房を揉みしだきながら、先端の乳首を交互に舐めた。

「はあん、はあん、はあん、はあん」

両の乳首を舐められるたびにリオレイアは、まるで楽器でも奏でているかのように甲高い声をあげた。

興が乗ってきたギャナツクは頃合いを見計らって、両の乳房を外側から押し密着させると、くっついた二つの乳首を同時に口に含んだ。

そして、思いつき吸う。

「ああ、殿下がわたくしのおっぱいを、ああ、しかも二つ同時吸い。なんて豪快な、さすがは世界の帝王になられるお方♪」

チューチューチュー

おっぱいを吸うことなんて子供のすることだと思っていたギャナツクであったが、一度吸い出したら止まらなくなつた。綺麗なお姉さんの二つの乳首を吸い取らんとするかのようになり、夢中になって吸いまくる。

「ああん♪ 陛下に乳首を吸っていただけの幸せ。もうダメ、わたくし、イク——っ♪」  
左腕でギャナツクの頭部を抱き、右手で逸物を握りしめたりオレイアは盛大にのけぞる。

「これで満足？」

シヨタ少年の質問に、変態お姉さんは恥ずかしそうに頷く。

「はあ、はあ、はあ……はい。しかし、わたくしとしましては、この陛下のおちんちんさままで貫かれましたのですが、陛下のご年齢でそれをお願いするのはいくらなんでも、酷というもの」

リオレイアの右手が、ギヤナツクの逸物を優しく包む。

「ああ、それにしてもなんて綺麗なおちんちんなのかしら？　こんなに小さいのに固くて、まさに至宝。はっ、固くなっていくのならば……」

リオレイアは不意に、なにか閃いた顔になった。そして、瞳孔を渦を巻かせながら自問自答する。

「陛下はまだ精通を迎える年齢ではありませんけど、大きくはなるのですね。大きくなるということはセックスもできるということでは……いや、しかし、いくらなんでも。ああ、でも陛下が精通を迎えるのを待っていたら、わたくしは二十代も後半になってしまう。二十代後半の処女、いくらなんでも恥ずかしくて陛下の傍にあげられない。しかし、二十歳のいまならば……。ああ、わたくしはいま陛下のおちんちんがほしい♪」

無垢な少年をまえに、発情期のお姉さんは悶絶した。

やがてなにやら決意したらしいリオレイアは、顔を真っ赤にして鼻の孔を膨らませなが

ら詰め寄ってきた。

「へ、陛下、よ、よよよよよろしかったら、その硬くなったおちんぼさまで、わわわわわわたくしの処女膜を貫いてはいただけないでしょうか？」

「リオレイアの処女膜？ なにそれ」

まったく性知識のない少年はきよとんとした顔をする。

一方でお姉さまのほうは、顔を真っ赤にして動揺を隠しきれていない。

「お、女の一番大切なものといえますか……、実際のところは単なる肉の膜なのですが……」

「しかし、女はこれを好きな殿方に捧げるのが一つのステータスなのです」

「仕方ないなあ、リオレイアの頼みならいいよ」

「あ、ありがとうございます！ それではさっそく！」

喜び勇んだりオレイアはいそいそとショーツを脱ぐと仰向けになった。そして、両手で自らの太腿を抱える。

ふっくらとした恥丘に、黄金の陰毛が渦巻いていた。

リオレイアは自ら両手の人差し指、中指、薬指の三指を、肉裂の左右にあてがうと、豪快にくばあをしてみせた。

（あ、おちんちんないんだ……）

男女の違いは薄々感じていたが、この事実にはギョナツクは仰天した。

薄い闇の向こうに、ピンク色の生々しい肉がみえる。そこからトロトロと雫しずくがあふれて  
いるようだ。

「……」

普段は凛々しく油断なく振舞う女騎士の、あまりにも無様な姿勢にギヤナツクは若干引く。

しかし、リオレイアのほうはそんなことお構いなしに、自らの人差し指と中指を膺孔の四方に添えて、開いてみせる。

「こ、この穴の奥に、膜のようなものがあるでしょ。ここに陛下のお逸物を入れていただき、突き破っていただきたいのです」

「えー、ここに入れるの？」

いまだ精通も迎えていないギヤナツクは異性に興味を持つ年齢ではない。だから、綺麗なお姉さんの女性器を見せられても、たいして興奮はしなかった。しかしながら、男と女の体の作りが違うのだということを見せつけられて驚きはした。

(なんかドロドロしている。ちょっと気持ち悪いかも)

いまにも、やっぱりやめた、といいだしそうなギヤナツクにリオレイアは慌てる。

「お願いします。ちよつとだけ、先っぽだけでもいいですから、陛下のおちんぼさまを入れてください」

くばあをしたお姉さんに泣きそうな顔で懇願されたギヤナツクは、いまさらやめるのは悪い気がして、溜息をつく。

「ふうん。ここに入れればいいの？」

少し腰の引けたギヤナツクであったが、いつもお世話になつてお姉さんのたつての頼みである。無下にすることもできず、仕方なくおっかなびつくり逸物を添える。

「はあ……はあ……はあ……ああ、陛下のおちんぼさまが、わたくしのオ○ンコの上に……」

「それじゃ、入れるよ」

世界最大の王国たるラルフイント王国の若手ナンバーワン女騎士だ。彼女に恋焦がれて、お嫁さんにほしいと考えている男や、親御さんは多かつたことだろう。

しかし、ギヤナツクは無感動に無造作に、逸物を入れた。

「はう」

まだ精通も迎えていない少年の逸物である。大きいとはいえない。成人女性の膣孔にはあつさりと入つた。

リオレイアはブルリと震える。

どうやら変態お姉さんは、愛しのショタチンポを食つただけで軽い絶頂に達したようだ。ギヤナツクの逸物の先端に、なにか柔らかいゴムのようなものが当たる。

「行き止まりになったよ」

「そ、そこが処女膜です。それをグイッと押し破ってください」

「うん、わかった」

ギヤナツクは言われるがままに、体重を腰に乗せてみた。

ビリ……ブツリ！

「はう」

小さな肉刀は、大柄なお姉さんの最深部の膜を切り裂く。同時に肉洞は締まり、肉棒をぎゅちりと握りしめた。

リオレイアはまさに刃に貫かれたような顔になっている。

「リオレイアお姉ちゃん、大丈夫？」

痛くはないのだが、ギヤナツクは驚く。一方でリオレイアは、結合部を見つめていまさらのように動揺の声を出す。

「こ、これはさすがにミレディさまに知られたら打ち首もの、いや、陛下を教育するのは傳役の務め。ああ、陛下の童貞を頂戴できた今なら、死して悔いなし」

感動をあらわにしているリオレイアとは違って、ギヤナツクにはたいした感動はなかった。

言われたから入れただけであり、切実に女を犯したいという欲望がなかったのだから当

然であるう。

そんなクールな少年に、変態お姉さんは恐る恐る質問してきた。

「あの……わたくしのオ○ンコにおちんちんを入れた感想はいかがでしょう。気持ちいいですか？」

「うん、まあ、わりと気持ちいいよ」

なんとか言葉を選んだギヤナツクの感想に、リオレイアは歓喜する。

「よかった。ならば陛下、そのまま腰を、前後に、ズコズコと動かしてください。おちんちんは女のおちんちんの穴をほじるためにあるのです」

「うーん、こんな感じ？」

ギヤナツクは言われるがままに義務感で腰を動かす。

もし、これが五年後であったなら、ギヤナツクは歓喜して腰を猿のように使ったことだろう。そして、あつという間に射精してしまい、その後も何度も猿のように求めたに違いない。

しかし、まだ精通前の少年である。射精できないのだから、急速な高ぶりはない。

綺麗なお姉さんの膣中で、逸物を動かすことは、痒いところを搔くような快感でしかない。

一方で二十歳のお姉さまは違った。いくら相手が精通前のお子様とはいえ、逸物は逸物

である。小さくも固い肉剣を押し込まれ、かき混ぜられては理性を保てない。

「ひい、ひい、ひい、ひい」

普段とはあまりに違うリオレイアの痴態に、ギヤナツクは驚いてしまう。

「リオレイア、痛いのか？ やめようか？」

「いえ、気持ちいいのです。陛下のおちんぼさままで、オ○ンコの中をグリグリされる。ああ、これこそ女騎士の誉れ。幸せにございます」

破瓜はかの痛みなど、歓喜のあまり消し飛んでしまっているようだ。

リオレイアが喜んでくれているのなら、ということにギヤナツクは一生懸命に腰を使った。

そうしているうちに、単に逸物を前後させるだけではなく、いろいろな動きの変化によってリオレイアの反応が違うことに気づく。

それと気づいてから、ギヤナツクはこの遊びが面白くなった。リオレイアの気持ちいい部分を探して腰を動かす。

「これは？」

「気持ちいいです、ああんグリグリ、もっとグリグリしてください。わたくしのオ○ンコをグリグリ♪ ああん、陛下のおちんぼさま最高ですう♪」

射精をすることがないのだから、ギヤナツクの動きに終わりはない。



おかげで二十歳の成人女性が、精通前のシヨタちゃんぽに掘られまくってイキまくってしまふ。

「ああ、あん、ちゅごい……」

主君の逸物に貫かれて、何度も何度も一方的にイカされたりオレイアは、両手を頭上に投げ出し、両足を潰れたカエルのような蟹股がまたにして、とろっとろになってしまった。

凍てつく氷のようだった瞳が、トロンと蕩とろけてしまつて焦点があわなない。口元は半開きとなり、熱い吐息とともに、口角から涎を垂らしている。

そうこうしているうちに、寝台の周りに人影が集まつてきた。

「うわ、鬼の親衛隊長リオレイアさまがすっかり蕩けていますね」

「そりゃまあ、愛しい殿下の童貞食いという、長年の夢を実現したんですから当然でしょ」  
「でも、こりゃ、さすがに犯罪臭くありませんか？」

ラルフィント国王の寢室の護衛が、独りだけのはずがなく、侍女、女官、女騎士といった人々が大勢控えていた。

後宮には基本、男は入れないから、さまざまな職種は女が受け持っている。

国王の傍に居るのだ。いずれも名門の姫君であり、その中から美貌と才能を認められたエリートたちである。

「たしかにね。しかし、これがミレディさまに知られたら、間違いなく極刑ね」

その感想に、腰を動かすことに集中していたギヤナックが我に返って驚く。

「リオレイア、死んじゃうの？」

「ええ、大事な大事な陛下の初物を盗み食いだなんて知ったら、さすがのミレディさまも烈火のごとくお怒りになるでしょうからね」

「ど、どうしよう？」

子供らしく動揺するギヤナックに、周りのお姉さまたちは悪戯っぽく笑う。

「大丈夫。ばれなければいいんですよ。秘密を知った者は、みんな共犯にしまえばいいんです」

「それって？」

戸惑うギヤナックに、女たちは下卑た笑いをすると、一斉に官服やメイド服、騎士装束を脱ぎ捨てる。

華やかな下着姿となったお姉さんたちは、寝台に乗ってきた。

「わたくしたちにも、陛下のおちゃんぽさまを入れてくださーい」

「わたしのおっぱいはいかがですか？」

「手はこっち」

ギヤナックの周囲には綺麗なお姉さんたちによる肉壁ができた。

そして、ギヤナックの顔にはつきつきと新たな乳房が押し付けられ、両手の指はお姉さ

んたちの陰部に入れられた。

「ダ、ダメだ。ひ、控えおろう。陛下のおちんぼさまは国の至宝だぞ。それをそんな寄つてたかつて食い物にしていいものではない」

逸物を入れられて理性を失っていたリオレイアは事態を悟って激昂した。それを女官たちは寄つてたかつて窘める。

「リオレイアさま、大人気ないですよ。陛下のおちんちんがほしいのはみんな一緒です。ささ、聞き分けてください」

暴れるリオレイアは、部下たちによって押さえ込まれてしまった。

「わかったよ。やればいいのであろう。こうすればいいの？」

一人にしてしまったサーピスを他の臣下にしなは不公平というものだろう。

仕方ないからギヤナツクは、一生懸命に綺麗なお姉さんたちの乳房を吸い、陰部をとき指で、ときに逸物でほじくりまわした。

普段は気取っているお姉さんたちが、逸物を入れられるととたんにだらしない表情を晒すのが面白くて、いろいろと女性を感じさせるポイントを探る。

とにかく、射精を迎えないのだから、逸物が小さくなつて使い物にならない、という事態には陥ることはなかった。そのせいでいつまでも続けることができたのだ。

「あはん、陛下のシヨタちゃんぼ凄すぎですう♪」

かくして、ギヤナックは精通を迎えるまえから、数限りない美しい女性と夜な夜な密事に励んだのであった。

※

(ああ、夢だな)

ギヤナックにはわかっていた。わかっていたが、あえて微睡まどろんでいたのだ。

いまの彼にとって、夢の中にしか安住の地はない。

目を覚まして寝台から身を起す気になれず、独りで寝台に横たわっていた。

ギヤナックが即位してから、六年の歳月が流れている。

「……」

寝台に横たわったまま周りをみる。

閑散とした部屋だ。決してあばら家というわけではないが、王宮とはほど遠い。そして、王宮ではありえないことに、だれもいなかった。

リオレイアはいない。彼女の部下だった女騎士たちも、身の回りの世話をしていた女官や侍女も、母様ミレデイも、宰相アマリスも、大將軍モーレもない。文武百官だれ一人としていなかった。

仙樹暦906年。十二歳のギヤナックは孤独の中に生きている。

王都ゴットリーのいずこかにある離宮の一室だ。ここがどこであるか、ギヤナックは

知らないし、興味もない。

部屋の扉が開き、黒髪をおさげにし、大きな丸眼鏡をした、ダサイ薄汚れたメイド服を着た小柄の女性がのそのそと入室してきた。

栄光あるラルフイント国王の傍仕えには、決してありえない容姿だ。

「魔王殿下、そろそろオルフェさまがお越しです。お出迎えの準備をなさってはいかがでしょうか？」

「そうだね」

「……」

眼鏡の陰気な侍女は慇懃いんぎんに一礼して、去っていった。

幽閉者と必要以上に親しく口を利くことはないように、上から指示をされているのだろう。

ギヤナックはけだるげに身を起こした。

逸物が朝立ちしている下半身のさまをしぼし見下ろして苦笑したギヤナックは、洗面所に向かった。そして、独りで顔を洗い、歯を磨き、服を着替える。

六年前はすべて侍女にやってもらったことだ。はじめは戸惑ったが、最近は慣れてきた。応接間に入ると、二人の女性が待ち構えていた。

「……」

二人とも、入室したギヤナツクをまえにして立ち上がりはしたが、平伏しようとはしなかった。

一応は上座が空けられており、そこにギヤナツクは腰を下ろす。それをみてから、二人は再び着席した。

一人は見知った顔だ。

年のころは三十路手前みそじといったところだろうか。

水色の長髪に、白い肌。知的でお洒落な眼鏡をかけて、生真面目で神経質そうな表情をたたえている。

群青色の制服をきつちりと着こなし、カフスポタンにいたるまで曇りなく磨かれているさまは、彼女の性格を表しているのだろう。

現ラルフィント国王オルディーンの義妹オルフェだ。

オルディーンが養子に入つたオゴタイ家の当主が、メイドに産ませた子だ。オルディーンの義妹であるが、愛人でもあるらしい。

事務処理能力に優れ、若くして武功もある。

事実上の宰相として新政権を差配しており、近いうちに彼女が正式な王妃になるのではないか、とも噂されている。

今一人はまったく知らない顔だった。

一年のころはオルフェと同世代の三十路前にみえる。

赤紫色の髪を巻き毛にし、白い顔に、細く高い鼻梁<sup>びりょう</sup>。大きな口に赤い口紅をべつとりと塗っている。

赤いジャケットを羽織り、中には白いドレスシャツ。首元には薄黄色のスカーフを巻き、赤いブローチで留めている。下半身はタイトなミニスカート。足には黒いストッキングを穿き、足下には赤いハイヒール。

女にしては背が高く、細身であるにもかかわらず胸は大きく突き出している。

シャープな切れ者然とした女だ。才媛と違っていいだろう。

多少、とうは立っていたが、間違いなく美女だ。ドレスを着ていれば貴婦人としてみなもてはやすことだろう。

とはいえ、世界一番の美姫と呼ばれた女性を母と持ち、生まれたときから王宮に出入りする美女美少女を見慣れているギヤナックからみれば、希少価値を見出すほどの存在ではなかった。

いかにも貴族的な女であり、底意地の悪さが顔ににじみ出ているように感じる。

「……それで、ぼくになにか用？」

ソファーにだらしなく退廃的に寝そべったギヤナックに、オルフェが生真面目に質問してきた。

「魔王殿下、生活にご不自由はありませんか？」

「別に……」

オルフェのほうをみようとみせずに、ギヤナツクは無感動に答えた。

この六年間で、ギヤナツクの生活は一変していた。端的に言えば、すべてを失ったのだ。そして、奪ったのがオルフェたちだ。いまさら命を奪われたところで何ほどのこともない。

「陛下から仰せつかっております。魔王殿下は、陛下の甥御なのですから、決して生活に不自由をおかけしてはならないと」

「あ、そう」

家に押し入り、すべてを盗んでいった賊が、最後に火を付けなかったからといって、感謝してやる必要はないだろう。

九百年前のラルフィント王国は、バーミアという山奥にあった小国だったらしい。それからの歳月をかけて、少しずつ少しずつ領土を広げていった。

特にギヤナツクの父親チムールは、優秀な兄弟に恵まれていたゆえに、四方に弟たちを配して、最大の版図を築いた。

ラルフィント王国による世界征服は、時間の問題。いや、領土を直接支配していないだけで、事実上は世界を制覇していた。

しかし、このとき問題が起きる。

ギャナックが生まれたのだ。

チムールは長い間、子宝に恵まれていなかった。そのため弟たちのうちのどれかを後継者にしようとしていたおりに、晩年になって寵妃ミレデイとの間に、後継者たる嫡子を儲けてしまったのだ。

チムールは歓喜したが、同時に弟たちに権限を委譲させすぎた、と恐怖した。

自らの健康に自信がなかったチムールは、ギャナックが成人するまで自分が生きているとは思えなかったのだ。

もし、ギャナックが成人する前に、自分が死んだらどうなるだろうか。

人望と実績のある有能な弟たちは、幼いギャナックを排して、自らがラルフイント王国のトップに立とうとするのではないだろうか。

そういう疑惑に囚われた彼は、いままで手足のように頼っていた弟たちを疎ましく思うようになる。

北のカルシュ、東のメルキゼデク、西のラプラコーンといった王弟たちを順調に排除していく。

しかし、南の末弟オルディーンに手を付ける前に、亡くなってしまった。

チムールに後事を託された宰相アマリスは、先王の路線に従いオルディーンの排除を画

策する。そして、まんまと謀叛を起こさせることに成功した。

計画通りに、ただちに名将と名高い大將軍モーレに十万の大軍を預けて討伐に向かわせる。

これにて、幼君ギャナツクの治世は盤石となり、千年の太平をもたらすラルフィント帝の誕生と思われた。

しかし、ここで予想外のことが起きる。

討伐軍がオルディーンの本拠地バルザックを包囲していたところを、天空から隕石の雨が降ってきたのだ。

これは希代の大魔導士ヴラットヴェインの使用した大魔法であった。

歴史上において、大魔法が実戦投入されたのは、このときが初めてである。

これ以後の戦争では、大魔法対策が取られていることが当たり前となった。

しかし、このときには予想していなかった新兵器の投入によって、討伐軍は空前絶後の被害を出してしまう。

討伐に失敗したということで、大將軍モーレは更迭。ギャナツクの傍仕えであったリオレイアもまた、お役目御免となった。

その後も、宰相アマリスはさまざまな手を打ったようだが、ことごとく失敗。王都ゴツトリープにまで、オルディーン率いる南軍が迫ったとき、王后ミレディは決断する。

すなわち、宰相アマリスの首を打って、オルディーンに届けたのだ。

こうして、王都ゴットリープに乗り込んできたオルディーンに向かって、ミレディに抱かれたギャナツクは額ぬかずいたのである。

ギャナツクは退位宣言書にサインをさせられて、オルディーンに王位を譲った。

それ以後のギャナツクは、一挙手一投足を見られる監視生活の中にある。

「だいぶ政情も落ち着いてきましたので、以後、殿下の身柄はオレアンダー家に預かってもらうことにしました。こちらはオレアンダー家の当主ガーネットです」

オレアンダー家といわれても、ギャナツクには初耳であった。おそらく辺境の貴族なのだろう。

オルフェが指し示した隣の女性の顔を、ギャナツクはわざわざみる必要を感じなかった。「ようするに新しい監視役でしょ？」

ギャナツクの皮肉げな言い分を、オルフェは慇懃に無視した。

「どうやら、魔王殿下はわたくしの顔をみていると不愉快なようですので、早々に退散させていただきます。オレアンダー卿、あとは頼みます」

「はい。お任せください」

颯爽と立ち上がったオルフェは、長居は無用とばかりに部屋を出て行ってしまふ。あとには赤紫の髪をしたオバサンが一人残った。

「オレアンダー家の当主ガーネットです。以後、魔王殿下の身の回りの一切は我が家が請け負います」

「ふん」

興味のないギヤナックが無視すると、ガーネットの眉間に稲妻が走る。

すつくと立ち上がったと思うと、ソファーにだらしなく座るギヤナックのすぐ傍に立つた。

そして、上から三白眼で見下ろしつつ同じことを繰り返す。

「オレアンダー家の当主ガーネットです。以後、魔王殿下の身の回りの一切は我が家が請け負います」

「それは聞いた」

パン

右頬を叩かれた。

一瞬、なにが起きたかギヤナックにはわからず、ぼうぜん 呆然とする。

ややあつて頬が熱くなり、自分の頬を叩かれたことを自覚した。

「……なにを？」

生まれて初めて他人に頬を叩かれたギヤナックは驚き、我を忘れて食って掛かろうとした。その首元に、ガーネットは右手を入れるとぐいっと押す。

「以前から思っていたのですが、この陰毛は濃すぎませんか？ 無理やり舐めさせられた陛下がとっても苦労していましたよ」

憎々しげに語ったエリザベスは、ナイフでチョリチョリと陰毛を剃り落としていく。

「ぐっ」

あつという間に、三十路近い女の股間がツルツルになってしまった。

とはいえ、丁寧に剃ったわけではないから、剃り残しもかなりあって、たいそうみっともない剃毛である。

屈辱に歯噛みをする女貴族を、ナイフを持ったメイドはさらに煽った。

「あらあら、ナイフで撫でられただけなのに、こんなに濡れてしまって、あなたドSを氣取っていましたけど、実はドMなんじゃありませんか？」

「殺してやる。もし、あたくしが自由を取り戻したら、あなたをこの世のものとは思えないおぞましい殺し方をしてあげるわ」

「ふっ、怖いですね」

鼻で笑ったエリザベスは、ナイフを紺色のスカートの中にして立ち上がった。

「さて、陛下。準備が整いました」

「えーと、どういふこと？」

「この女に一発ぶち込んで、身の程を教えるあげてはいかがでしょうか？」

エリザベスの言わんとしているところを察したガーネットは、縛られたまま嘲笑の声をあげる。

「あははっ、なにかと思つたら、あたくしがそいつの短小包茎のヘナチンでどうこうなると思つていますの。お笑い草ですわ」

それを蔑みの表情で見下ろしたエリザベスは、自らの両肩を抱いて、恍惚の表情を浮かべて腰をくねらせる。

「あなたは知らないようですね。陛下のテクニシャンぶりはその筋では有名なのですよ。どんなに不感症な女でも、陛下の手にかかるとこの世のものとは思えない快樂に、我を忘れてケダモノのように泣きわめいてしまうと」

「えーと、だれがそんなことを言つたの？」

「思わずギヤナツクは真顔で質問してしまふ。」

「リオレイア將軍がいろいろなところで吹聴しておられます」

「ああ……リオレイアお姉ちゃんか……」

さもありなんという名前を聞いて、ギヤナツクは顔を手で覆つた。

モーレ大將軍の孫娘で、ギヤナツクの傅役だった女騎士だ。女騎士の鑑のような女性なのだが、唯一の欠点が重度のショタコンであったことだ。ギヤナツクの精通前の逸物を弄り倒し、ついには処女まで割つてしまった。その後はもうやりまくりだったことは言うま

でもない。

ギヤナツクの精通も、リオレイアの体内で迎えたほどだ。

「リオレイアお姉ちゃんって元気なの？」

「それはもう、元気すぎるほどに。陛下の復権のために精力的に活動しておられます」

「……そっか」

自分の親しくしていた人はみなくなってしまうた、と思っていたから、懐かしい名前が聞けて嬉しい。

いろいろと絶望的な状況であったが、希望が見えてきた。

なにがなんでも、この窮地を脱してバーミアに行こう、とギヤナツクは決意を固める。

「それじゃ、ぼくも頑張らないとね」

手始めにガーネットを犯すべきだ、というエリザベスの提案を受け入れて、ギヤナツクは逸物を取り出した。

それをみて、ガーネットは鼻で笑う。

「ふん、どうせ三擦り半なんですよ」

その言い分に、ギヤナツクもカチンと来た。

たしかにいままでの陵辱生活に、フラストレーションがたまっていたことは動かしがたい事実だ。

(この失礼な女を、ぼくのおちんちんでヒーヒーいわせてやりたい)

という抑えがたい願望が、ふつふつと沸きあがってきた。

「まあ、とりあえずやってみようか」

ギヤナツクは、後ろ手に縛られているお姉さんを、うつ伏せにして尻を突き出させると、その後ろに立った。

育ちのいいギヤナツクは、本来、女性の嫌がることはしたくないし、まして縛られて動けない女性をやるなど矜持が許さない。しかし、この女に關しては違った。

いままでさんざんに性的虐待されてきたのだ。逆に性的に屈服させたい、という男らしい欲望が湧いてくる。

肛門と女性器を晒しながら、ガーネットは必死に叫ぶ。

「入れたければ入れればいいでしょ。でも、あたくしはラプラコーンさま以外のおちんちんでは、決して感じたり、イつたりしないわ」

「そっか、ガーネットは本当に、ラプラコーンの叔父上を愛していたんだね。でも、せつかくの美人が亡くなった人に操を立てて、セックスをしないなんて悲しすぎるよ。ラプラコーンの叔父上も悲しむと思うな。だから、ぼくが思いつきり楽しんであげてあげてね」

嘔うそきつつギヤナツクはお子様ちゃんぽをぶち込んだ。

「うほっ」

意に添わぬ逸物を呑み込んだガーネットは、思わず背筋を反らして喘ぐ。

ぬめぬめとした生暖かい膣洞が、小さな逸物に絡みついていた。

「うわ、すごい締まる。ガーネットは本当に、ラブラコーンの叔父上が亡くなってから、おちんちんを食べてなかったの？ 本当にもつたいないなあ」

ギャンナックにしても久しぶりに味わった女肉である。舌なめずりをしながら尻を抱き、腰をリズムカルに動かし始めた。

グチュグチュグチュ……

はじめはそれほど濡れていなかったのだが、肉棒で掘削するほどに豊かな香水が湧き出してきた。

「くっ、くっ、う、嘘よ、あたくしがこんな、ああ、お子様ちんちんに感じるだなんて、あつ、くっ」

自分の玩具だった少年に一方的に犯されることは、プライドが許さないのだろう。ガーネットは必死に感じまいと、努力しているようだ。

しかし、そんな我慢をすることで、反動でより感じてしまうのが、人間の体というものである。

(昔はこうやっていろんな女性とエッチしたんだよなあ)

物心ついたときから、身の回りの綺麗なお姉さんたちと当たり前にエッチしていたギャ

ナツクである。

子供と侮って自信たつぷりに誘惑してきたお姉さんを、逆にトロトロにしてみるのは楽しかった。

「はあ、オ○ンコ気持ちいい。ぼく、やっぱりセックスって大好きだな」

すっかり忘れていたテクニックを思い出し確認しながら腰を使ったギャナツクは、しみじみとなんとも正直な感想を口走る。

「な、なに？ このおちんちん、ひい、小さい、小さいのに、あ、固くて、あたくしの気持ちいいところに的確にあたる、ああ、ダメ、そこはダメ、激しい、激しすぎる。くう〜」  
クチュクチュクチュクチュ

必死に奥歯を噛み締めて、喘ぎ声を我慢するガーネットだが、卑猥な水音は石牢の中に響き渡っている。

ピクン、ピクン、ピクン、ピクン

ガーネットの意思とは裏腹に、その肉体はもろかった。腰から臀部にかけて痙攣を繰り返している。

（うわ、オ○ンコがおちんちんを吸っている。ガーネットって性格は悪いけど、オ○ンコはかなりいいかも）

久しぶりの女肉の味に、お子様おちんぽはたちまちのうちに限界を訴える。

「ガーネット、中に出すね」

ギヤナツクの宣言に、ガーネットは血相を変える。

「ちよ、ちよつと、ウソでしょ。あたくしはラプラコーンさまのものなのよ。中だけは、中だけは許して」

ガーネットは必死に両手で這って逃げようとするが、腰に力が入らないようだ。

「ダメ。射精は中ではないと女の人も欲求不満になるよ」

楽し気に宣言すると同時に、ギヤナツクは逸物を押し込んで、思いつき射精した。

ドビュユユユ!!!

「ああああ、ダメえ!？」

ガーネットのもとに幽閉されてから、今日まで完全に射精管理されていた。挑発されて屈辱的な射精を繰り返していたが、結合だけはさせてもらえなかった。

好きではなかったが、ずつとやりたいと思っていた女体に、念願かなって射精できるということで、まるで瀑布ばくふのような勢いで噴き出した。

「あ、そんな、な、なんて量を、ああ……」

成人女性である。膣内射精されたことで、ガーネットは強制的に絶頂してしまったようだ。

射精する逸物を、肉洞はキュンキュンと心地よく絞ってくる。

「ふう、気持ちいい」

射精を終えたギヤナツクは満足の吐息をつく。膣内射精により不本意な絶頂をさせられたガーネットは、いまさらのように高慢に嘲笑する。

「ふ、ふん、やつぱり、早いじゃない。ラブラコンさまの足下にも及ばないわ。こんな残念ちんちんにやられても、犬に噛まれたようなものよ」

「うん、そうだね。だから、まだ続けるよ」

軽く応じて、ギヤナツクは腰をそのまま使い続けた。

「ちよ、ちよつと、いま、出したでしょ。そ、そんな連続でなんて」

動揺するガーネットに、ギヤナツクは嘯く。

「ガーネットのいう通りぼくって早いみたいなんだ。その代わり何回でもできるよ。オ○ンコに一度入れたおちんちんを抜かずに、そのまま三回射精することを抜かず三発というんでしょ。ぼくあれ得意だったんだ。あれをやつてあげると、どんなに偉そうにしていたお姉さんでも、トロット口になつちゃうんだよね。ああ、ぼく今日は三回どころか、十回でも二十回でも出せそうな気がするよ」

「う、うそでしょ、そんな、あつ、あつ、あつ、あん」

一度膣内射精されたことで、ガーネットの中の留め金が外れたようだ。気持ちよさそうに喘ぎだした。

グチユクヂユクヂユ……

膣内で精液と愛液がこね回される。肉棒を押し込むたびにあふれ出し、引き抜くたびに掻きだされる。

そして、ギヤナツクは定期的に射精した。

「あ、また、ダメ、これ以上は出さないで。これ以上出されたら、あたくし……ああ、また子宮にかかっている。ビュービューとラプラコンさま以外のものが……」

ビクビクビク

屈辱と背徳感に涙しながらも、熟れた肉体は何度も絶頂を繰り返した。

「ガーネットつてさ、淫乱を気取っていたけど、実はこういうことあまり慣れてないですよ？」

「いやー！ こ、こんな子供に、お子様ちゃんにイカされるだなんて、いやー！」

ガーネットがいかにか泣き喚こうと、ギヤナツクの逸物は固さを失わず、リズムカルに動き続ける。

そして、膣内射精を繰り返した。

子宮に侮っていた少年の精液を浴びせられるほどに、権高で鼻もちならなかった女貴族の理性は溶けていったようだ。

無様に大口をあけて涎を垂らし、大きく見開いた目元から涙を流す。



破顔したエリザベスはギヤナックを励ましてくれたが、その笑顔がギヤナックには眩しかった。

彼女の忠誠を受けるに相応しい男に、どうしても自分が思えなかったのだ。しかし、胸の動悸が激しくなった。

「エリザベスが助けてくれたとき、本当に嬉しかった。なにかお礼をしたいけど、いまのぼくはなにもできない」

「そんなことはお気になさらないでください。お気持ちだけで充分ですよ」

「あの……こんなこというの、なんだけど、ぼくいま、ベスと物凄くエッチしたい」  
ギヤナックの懇願に、エリザベスはあつさりと同く。

「別に構いませんよ。わたしは陛下に命を捧げる者です。貞操を捧げるぐらい当たり前で  
す」

その返事が、ギヤナックは不満だった。

「いや、そういうのじゃなくて、なんというかな？ エリザベスをみていると、こう胸がドキドキするとか」

「？」

ギヤナックの言わんとしていることが理解できなかったのだろう。エリザベスは戸惑った表情を浮かべている。

「単にエッチしたいんじゃないんだ。ぼくはその……なんというか子供のころからいろんな女性とエッチしたことがあるよ。侍女とか女官とか女騎士とか、みんなぼくとエッチするのは誉れだといって喜んでくれた」

精通を迎えるまえから、当たり前前に綺麗なお姉さんたちが侍り、お風呂に入れてくれたり、添い寝してくれた。

そして、そういうお姉さんたちはたいていは、ギヤナックのお子様おちんちに悪戯して、自分の乳房を吸わせてきたりしたものだ。

教育と称して、逆強姦してきた女官も多い。

「でも、そういうのとは違うんだ。ベスをみているとこう胸がドキドキして、自分からエッチしたいって思った女性は、ベスが初めてなんだ」

「えっえーと、それは」

困惑するエリザベスに、ギヤナックはなおもいいつのる。

「うーと、なんというのかな。ベスのオ○ンコにおちんちん入れたい」

「それは構わないと申しておりますが……」

必死にギヤナックの言わんとしていることが、どうしても理解できないらしくエリザベスは困惑している。

「いや、そうじゃなくて。ベスのオ○ンコの中でおちんちんをいっぱい動かして、白い液

体をいっばい注ぎこみたいって切実に思う。うゝ、こういう心理状態をなんといいのか？  
なにか文学的な表現があつたような……。あ、そうだわかつた。思い出した。恋だ。ぼく  
はベスに恋しちゃつたんだ。これが初恋つてやつだ」

「初恋ですか？」

エリザベスはきよとんとした顔になる。逆に興奮したギャナツクは、身を起こしエリザ  
ベスの両手を取つて必死に訴える。

「ぼく、ベスのことが好きなんだ。愛している。エッチもいっばいしたい。こんな気持ち  
になつたの初めてだ。だからお願い、結婚して」

「え？」

少年の情熱に圧倒されて、お姉さんは困惑を隠しきれない。

「ぼく王様になつても、とつても無力なんだ。でも、ベスが一緒にいてくれたら、心が強  
く持てると思う。だから、これからずっと一緒にいてほしい。だからお願い結婚して！」

大真面目に求婚されたエリザベスは頓狂な声をあげてしまった。

「な、なにをいっているんですか、いきなり。わたしは名もなき農民の娘です。陛下のお  
役にたて、肉便器として情けを賜れば、それで幸せな女です。そ、そんなわたしにけ、  
結婚だなんて」

「ベスはぼくのこと嫌いなのか？ 女騎士として命を捧げ、体を任せても、心までは自由に

されたくないってこと？」

「いや、そのようなわけでは……。ただ、わたしは騎士。つまり、使用人ですよ。それを妻に迎えたいなどと、お戯れがすぎます」

頬を染めたエリザベスは顔を背ける。

「別にベスを雇ったつもりはないし、お金だって払ってないでしょ」

「わたしなど新参者ですし……。もうすぐあの華やかなリオレイアさまと再会できますよ。あの方はすごい美人ですし、陛下のことをとつても愛されています。あの方に求婚されてはいかがですか？」

のけぞりながら必死に説得を試みるエリザベスに、ギヤナックは詰め寄る。

「そりゃ、リオレイアお姉ちゃんのことには好きだよ。その……。なんとというか、エッチもすごい……。でも、ベスに対する好きは特別なんだ。こんな気持ちになったのは初めてなんだ。お願い。ベスと結婚したい」

「あの……。ですね。それは吊り橋効果といいますか、一時の気の迷いで、はあ、わかりました。陛下が無事に王位を回復され、まだその気持ちに変化がなければ、妻を迎えてください」

「ほんと、やった——！」

歡喜したギヤナックは、いきなりエリザベスの唇に接吻した。

「う、うむ、うむ……」

ギヤナツクは夢中になってエリザベスの唇を舐めまわし、そして、唇の中に舌を押し入れた。

エリザベスはいささか戸惑ったようだが、素直にギヤナツクの舌を受け入れて、自らの舌を絡めてくれた。

そして、エリザベスを押し倒す。

愛を知らぬエッチばかりしてきたとはいえ、数だけはこなしているのだ。こういうところは手馴れたものだ。

接吻を終えたギヤナツクは、エリザベスに訴える。

「ベスはぼくの婚約者。恋人だよね」

「は、はい。しかし、あの……陛下」

ギヤナツクの情熱に押し切られたエリザベスは、困惑しながらも受け入れてくれたようだ。

「なに？」

「恋人というのは、なにをすればよろしいのでしょうか？」

「もちろん、エッチするんだよ」

迷わず答えたギヤナツクは、エリザベスのメイド服の胸元をはだけさせる。中から白い

ブラジャーに包まれた大きな乳房があらわとなる。

ギヤナックは手馴れた動作でブラジャーをめくり、乳の下においやる。ぶるるると、巨大な肉塊が二つ、外界に飛び出した。

「うわ、ベスのおっぱい地味どころか、すごい大きい」

「いや、別に……、リオレイアさまや、あの変態女貴族よりも小さいと思いますが……」  
「いやいや、たしかに大きさだけでみたら、ガーネットより小さいかもしれないけど、ベスは体が小さいから、すっごく大きく見える。こう柔らかい曲線が素晴らしいというか、肉饅頭みたいで美味しそうというか、かぶりついたら中にジューシーな肉汁がいっぱい溢れてきそうとか、もうたまらない♪」

飢えた狼のように涎を垂らさんばかりになったギヤナックは、両手でふかふかの肉饅頭をそれぞれ握りしめると、頂きの赤い花びらにむしゃぶりついた。

「あん♪」

年下の少年に求婚されて押し倒されたお姉さまは、たまらず甘い悲鳴をあげた。

「チューチューチュー」

ギヤナックは肉まんを揉みしだきながら、ピンク色の乳首を交互に吸う。ほどなく乳首はピンピンにしこり立ってしまったが、やめない。

物心ついたときから、いろんなお姉さんの乳首を吸いまくってきた少年は、女性の乳首

は勃起してからが、本当の性感帯だと知っているのだ。

「ああ、そんな、乳首ばかりそんな執拗にしゃぶられては、わたし、わたしは、あああ♪」  
ギヤナツクの頭を両手で抱いたエリザベスは、甘い嬌声をあげてのけぞる。

「どうやら、ベスは乳首だけでイったみたいだね。どう、ぼくのこと好きになった？」

「そ、それはもう……陛下下ったら、かわいい顔して、本当に女性の体のことを知り尽くしておられるのですね」

「それでもないよ。女性の体は不思議でいっぱいだ。ベスのスカートの中も、ぼくには謎だらけだ」

本当に不思議に思いながら、ギヤナツクはエリザベスのスカートをめくる。

ナイフも、折り畳み式の槍も、刀剣も、弩も、ハンマーもない。あつたのは白いストッキングと白いガーターベルトに包まれた肉付きのよい足と、白いショーツだけであつた。

「どうかなさいましたか？」

「いや、弩もハンマーもないなっと思って」

困惑しているギヤナツクに、エリザベスは悪戯っぽく応じる。

「スカートの中の秘密は、殿方には永遠の謎なのです」

「そ、そうなんだ」

いつどこから、ナイフが飛び出てくるのか、とおっかなびつくりしながらも、白いコッ

トンのショーツに手をかける。

クロッチ部分にはすでに染みができていた。

そのうえに、ギャナツクの右手の中指の先を添える。

「っ!？」

びくつとエリザベスの四肢がこわばった。それをみてギャナツクが質問する。

「ベスつてさ、もしかして、こういうことするの、初めて？」

「はい、恥ずかしながら」

エリザベスの答えに、ギャナツクは破顔する。

「恥ずかしがることなんてないよ。好きな男と出会うまで貞操を守るのは大事なことだと思うよ。でも、ベスはぼく以外の男のまえで股を開いたらダメだよ。ベスはぼくのお嫁さんになるんだからね」

「は、はい……」

エリザベスは赤面しながら頷いた。するとショーツの染みが一段と大きくなったようだ。薄い布越しにも、勃起したクリトリスと、膣孔の位置がはつきりとわかる。

ショーツを脱がそうと両手を伸ばしたギャナツクだが、思いとどまった。

ここは野外だ。下手なところにショーツを置いたら、なくしてしまいかもしれない。いまは旅の途中であり、そうそう予備の下着もないだろう。

旅によつて所帯臭いことを覚えてしまったギヤナツクは、エリザベスのショーツの股布を摘まんで左にずらす。それだけで女性器をみる事ができた。

「うわ、すごいぬるぬる」

艶やかな黒い陰毛はすっかり濡れそぼっている。その女の森に指を入れたギヤナツクは、最深部の亀裂の左右に指を置き、V字に開いた。

くばあ

おとなしい顔して、滅茶苦茶強いお姉さんの肉裂が開く。クリトリスは意外と大粒だが、仮性包茎のようで、赤い先端が少し顔を覗かせているだけだ。

「ああ、これはぼくのオ○ンコだ」

感極まったギヤナツクは、肉付きのいいお姉さんをまんぐり返しにして、蜜あふれる穴にしゃぶりついてしまった。

じゆるじゆる

「ああ、そんな……飲まないでください。恥ずかしい」

エリザベスは顔を真っ赤にして訴えるが、ギヤナツクは構わず肉羽をまさぐり、肉芽を舌先で転がし、膣孔に舌を入れてかき混ぜた。そして、あふれ出る愛液を思う存分にむしゃぶり飲んだ。

「あつ、ああ、ああ〜ん」

羞恥に悶えながらも、歡喜の声をあげるエリザベスの痴態が新鮮だった。こういう純情っぽい反応をしてくれる女性は、あまりギヤナツクの傍にはいなかったのだ。

やがて満足したギヤナツクは、女性の陰部から顔をあげると、我慢の限界に達していた逸物を構える。

「はあ、美味しかった。それじゃ、ベス、ぼくのおちんちんを入れるよ」

「はい。わたしを陛下の肉便器の一人にお加えください」

濡れた股を開いたエリザベスは拒む素振りはない。しかし、その口上がギヤナツクには不満だった。

「それじゃダメ。ぼくのことを愛しているから、おちんちんを入れてって言って」

「え、えーと」

戸惑った顔をしながらも、エリザベスは言い直す。

「あ、陛下を愛しております。ですから、陛下専用のオ○ンコに、陛下のおちんぽさまを入れてください」

「うん、愛しているよ。ぼくの大事なお嫁さん」

宣言すると同時に、ギヤナツクは勢いよく逸物を押し入れた。

ぶっん！

乙女の象徴たる肉膜が破れる感覚が、ギヤナツクの逸物にすっかり伝わってきた。

「はうう」

両手を握りしめたエリザベスは、ナイフや木槌きうちを振り回すとは思えぬかわいらしい悲鳴をあげた。

瞳孔はきゅつと締まっていたが、それを肉棒で押し開きながら、一気に最深部まで入れてしまう。

ズブズブズブ

根元まで逸物が入り、互いの恥骨が当たったところで、エリザベスは恐る恐る伺ってきた。

「あ、あの……陛下？」

「ベスのオ○ンコ、すつごく気持ちいい」

ギヤナツクの感想に、エリザベスは安堵の表情を浮かべる。

「そ、そうですか……よかったです」

年上とはいえ、エリザベスは初めてなのだ。対してギヤナツクは子供なのに百戦錬磨。他の女に比べてどうか、と不安だったのだろう。

単に締めまりがいいとか、ぶつぶつしているとか、そういう構造的な気持ちよさでならば、もつとすごい肉壺に何度かあったことがある気がする。

しかし、そういう感觸ではなく、ギヤナツクは心が気持ちよかつた。生まれて初めて、愛する女性に自分から逸物を入れたのだ。

また、エリザベスの膣孔から溢れる蜜量が一気に増したように感じる。

（あはっ、ベスのオ○ンコって濡れやすい体質なのかも。ビショビショだ。温かくておちんぼ溶けそう♪）

歡喜したギヤナツクは、小柄な体格なのに意外と肉付きはいいメリハリボディお姉さんの乳房にむしゃぶりつき、そうしながら存分に腰をふるって突きまわした。

「あっ、あっ、あっ、陛下のおちんぼさまがわたしの中で元気に暴れまわっている♪」

破瓜の痛みはあつても、愛しい男に犯されていれば精神的に高まってくるのだろう。エリザベスの歡喜の声を聴いて、ギヤナツクはさらに張り切って腰を使ってしまった。

グチュクヂュクヂュ……

卑猥な水音が、長閑な村の郊外に響き渡る。

とはいえ、いくら経験豊富でも、まだ十代前半の少年だ。逸物の耐久力はそうない。たちまち高まった射精欲求に悲鳴をあげる。

「べス、ぼくの愛を受け止めて」

「あ、え!! 陛下のおちんぼさまがビクビク……!!」

驚くお姉さんを組みしだいて、ギヤナツクは逸物を思いつきり押し込みながら射精した。

ドクン！ ドクン！ ドクン！

「ああ、陛下の愛が入ってきます。温かい♪」

破瓜の痛みに耐えていた女性は、絶頂したわけではないようだが、男に精液を注がれるという、牝の根源的な喜びに浸っているようで、幸せそうな表情をしてくれていた。

ギャンナックにしても、生まれて初めて愛する女性の体内に射精したのだ。格別な味わいがある。

（ああ、愛のあるセックスって最高♪）

感動したギャンナックが、エリザベスの唇を求めると、素直に受け止めてくれた。

二人は夢中になって唇を吸い、そのまま逸物を抜くことなく二戦目に突入する。いや、愛する男女は、時間の許す限り結合を解くつもりはなかった。

一方、愛し合う男女がまぐわいに溺れていたすぐ近くの馬車の中では、愛の欠片かけらもないセックスをしている女がいた。

「あん、ふ、太い。大きすぎよ、壊れる。そんな丸太みたいな粗野な代物で、激しくされたら壊れちゃう、あん、ちよ、ちよつとあんた何発するつもりなのよ。あん、やだ、イキたくない！ こんな大きくて太いだけの絶倫ちんちんなんか、このあたくしが、ヒイ——!!! イキたくないのに、あん、悔しい！ ああ〜ん♪ こんな連続で……許さない。絶対に許さないわ。あたくしにこんな、あああ〜ん♪」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫  
S.E.N. コスプレ

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

フリリダム120%!?  
ジャンルにこだわれない  
ドキドキ×ラブ!

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の  
外伝作品もあり!!  
電子書籍しつらめなオリジナルノベル!

姫騎士 クラズメイト!

ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト  
から書籍化!  
アカタインノベルズ



異世界  
ドキドキ  
クラブ  
www.doki-doki.jp

ドキドキクラブな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫